第3章第2節（史跡松江城の本質的価値と構成要素について）の要点

（1）史跡松江城の本質的価値（第3章 p.47）

- 「史跡の本質的価値」とは、文化庁発行の『史跡整備のてびき』によると「史跡指定地内の土地に存在する遺跡が、土地と一体となって有するわが国の歴史上又は学術上の価値」。史跡が有する本質的価値とその構成要素を特定し、それらを適切に保存管理し、次世代へ確実に継承していくことが重要。（第3章 p.47）
- 昭和9年の史跡指定理由及び史跡指定後に行われた発掘調査や松江市史編纂過程での調査研究成果などを踏まえて、史跡松江城の本質的価値を以下のとおりまとめることができる。
 - 慶長5年（1600）の関ヶ原合戦の戦功により出雲・隠岐二ヶ国の太守となった戦国武将の堀尾吉晴、忠氏父子が、宍道湖の湖畔に位置する亀田山を新たな居城として計画し、吉晴が実質的な指揮を執って慶長12年（1607）頃から慶長16年（1611）頃に新たに築城した平山城。
 - 亀田山（標高28.4m）頂上に本丸、本丸の南側に二之丸、北側に腰曲輪、東側に中曲輪と外曲輪（二之丸下ノ段）、西側に後曲輪を配置し、腰曲輪の北側には切通し（堀切）を挟んで北之丸や外曲輪を置く。これらの曲輪の周囲には内堀を巡らせ、亀田山の南麓には内堀を挟んで三之丸を配置する。この縄張り構造や城郭を構成する石垣が現在も残る、山陰地方における代表的な近世城郭。
 - 発掘調査や史料調査から、慶長年間に築城された堀尾氏による縄張りが江戸時代を通じて基本構造となることがわかる近世城郭。
 - 権力と城下町の繁栄を象徴する四重五階地下一階の天守が本丸に現存する近世城郭。

（2）史跡松江城の構成要素の概要（第3章 p.47～51） ➤資料3-1 参照

- 「史跡松江城保存活用計画」と同様、史跡松江城に所在する構成要素を、「史跡松江城の本質的価値を構成する諸要素」に、「近代以降の松江城の歴史的価値を構成する諸要素」、「本質的価値と密接に関わる諸要素」、「その他の諸要素」を加えて4つに区分する。

なお、「史跡松江城の本質的価値を構成する諸要素」は以下の4つからなる。

- 城郭を構成する歴史的建造物（松江城天守）
- 縄張・城郭を構成する石垣、堀等
- 地下に埋蔵されている遺構・遺物
- 近世から続く樹木

（3）史跡の周辺地域の環境を構成する諸要素の概要（第3章 p.51～52）

- 「史跡松江城保存活用計画」で掲げたように松江城を構成する三之丸跡が史跡指定されていないことも踏まえ、「史跡の周辺地域の環境を構成する諸要素」として以下のとおり位置づける。
 - 松江城の価値に関連する諸要素
 - 松江城の周辺環境を構成する諸要素